

技術・職業教育分科会の報告

佐々木 享

日教組の第47次教研全国集会は雪の散らつく鹿児島市で1月22日から25日まで開催された。櫻島にはすっかり雪が被さっていた。技術・職業教育分科会は、23日から25日まで市内の鴨池会館（公民館）で開かれた。共同研究者は田中喜美、佐々木享、幡野憲正、長谷川雅康の4名。分科会第1日は全体会で、後の2日間は中学校と高等学校の分散会とされた。報告書は中学校が20、高校が9、養護学校1である。養護学校から、しかもそれが徳島から報告されたことは特筆される。以下には特徴的な話題につき述べる。

第1日の開会行事の後、午後はまず学校五日制をテーマしたが、このテーマ自体はあまり盛り上がりなかった。しかし、「技術・家庭」を「技術」の教師と「家庭」の教師が分担していることから生ずる矛盾が大きな話題となり、「技術」と「家庭」とを分けることの重要性が改めて確認された。高校からの問題提起と討論については、幡野憲正氏の報告に譲る。情報化の問題に関しては、三重から地元の大学の協力を得てインターネットで外国と交流した実践報告があった。しかし、報告者自身はこれが技術教育だと思っていないと述べており、情報基礎に関してはこれを技術教育として位置付ける必要があるという主張は、私にしてみると意外にすんなり通る感じがあった。

中学校分散会。

報告審を領域別にみると、栽培がなかったことを除けば、概ね均衡がとれていた。

情報教育に関して愛知、兵庫、静岡から報告があったけれども、参加者からは技術教育

としてはどうかという疑問が続出した。田中共同研究者は、情報教育では制御が重要だという主張に関連して、シーケンス制御とフィードバック制御の違いを懇切に説明した。

木材加工に関しては、茨城、石川（養護学級）、千葉から報告があった。選択の時間の「技術」で地域の福祉施設へのサービスを実施した千葉の報告が、いわゆる「総合的な学習」の時間の活用を道を開き得る実践として注目された。鉋の刃の研ぎが話題となった。

電気に関しては、岩手、大分、福島から報告があった。

金属加工に関しては、長崎、広島、福岡から報告があった。長崎の実践は、ナイフの製作と生徒の集団づくりとを結合したユニークな実践として注目された。会場では、ナイフの危険性が話題となった。しっかりした生活指導と結合すれば決して危険ではないと報告者は述べたけれども、集会後程なくしてナイフによる教師殺傷事件が発生したのは残念。

機械に関しては、佐賀、山梨から報告があった。

教員の自主研修に関して岡山、北海道から報告があった。教員自身の興味を喚起すれば、教員はいわゆる自腹でも参加し学習するものだという、経験を交えた岡山の発言には迫力があった。優れた実践を報告した長崎は地元の大学との結びつきを強調していた。

新学力観に基づく観点別評価を取り入れたためにその矛盾を露呈している実践報告があったのに、あまり話題にならなかったのは残念であった。

（愛知大学短期大学部）